



郡戸小学校木造校舎の思い出

昭和30年前後に通った郡戸小学校の思い出は今でも鮮明に残っている。もちろん木造校舎にちなんだことも。その中の2つを紹介したい。

ひとつはスズメ取りである。よく校舎の屋根の軒下にスズメが巣をつくることがあった。高学年になった頃、ちょうど教室の窓の外にある巣に子スズメが「チュンチュン」と大きく鳴いたときがあった。休み時間に教室の高い窓枠に登り、おそろおそろ手を伸ばし、その子スズメを捕まえた。そして友達とその子スズメをわけて、家に連れ帰って育てたことがあった。後日、担任の先生に叱られたことも今は懐かしい。

もう一つは、木造校舎の床下の思い出である。木造校舎の床板は教室も廊下もすき間があった。そのわずかなすき間から定規や小銭が落ちることがあった。ある日、それを友達と拾おうということになり、秘密の入り口をつくり、先生に見つからないように床下に潜り込んだ。そして、暗闇の中をはいまわり、何とか数十円を見つめることができた。その小銭でキャンデーを買って友達と帰りに食べたことも今では思い出である。

(鴨志田 治)



学び舎の思い出

学校は長い間、地域のシンボルとして存在し、子どもたちを中心に地域の人々の交流の場として重要な役割を果たしてきました。学校での数々の思い出を紹介する「学び舎の思い出」シリーズの最終回。懐かしい校舎の写真と共にご紹介いたします。

西小沢小学校・西小沢中学校

小学校に入学した昭和22年4月、終戦直後で学校の窓ガラスには、ペンキで「西」の文字が描かれていたのを、今でも鮮明に思い出します。

小学校の西側に中学校が隣接しており、グラウンドは小中共用でした。したがって中学校のクラブ活動は野球部ぐらいで、活発に活動していなかったと思われます。

小学校・中学校とも体育館はなく、入学式・卒業式・学芸会等は二つの教室を抜き使用していました。

グラウンド北東側には大きな柳の木があり、西小沢のシンボルとして親しまれておりました。また、学校の周りには桜の木があり付近の人々からも親しまれていました。今は簡単に敷地内に入れないですが、当時は自由に出入りできました。

当時の部会活動は坂本部会と称して、東小沢・坂本・久慈浜の三地区内で活動しておりました。これは、常陸太田市に合併するまで続いていたと思います。小学校の発表会を坂本小学校で行われていたことを覚えております。



秋の運動会は、グラウンドが小中学校共用なので、小中学校合同で行われます。メインイベントは、小学1年生から中学3年生までのリレーで大いに盛り上がりました。

中学校の楽しい思い出の中に、海浜学級があげられます。夏休みに水木の浜の旅館にみんなで出かけ、楽しい時間を過ごしました。

今は残念ながら昔の面影は何も残ってはいないといってもよいでしょう。

(中村 龍一郎)



久米第二小学校



久米第一小学校



南中学校 (久米教場)



南中学校 (郡戸教場)

金砂小学校・上宮分校・金砂中学校

昭和30年代、給食はなく、皆弁当を持って通っていた。冬にはクラスごとにみんなの弁当を入れる箱があり、その箱は底が網になっていて、弁当を温める場所に運んだ。運ぶ時にふざけていると、みんなの弁当をひっくり返してしまうので、とても慎重に運んだ覚えがある。弁当に「たくあん」が入っていると、温めた時に匂いがしてすぐ分かった。その後、給食が始まると、いつもニコニコしてやさしい給食のおばさんは人気者だった。運動会は、小学校中学校合同で行い、中学生が昼休みに地区対抗リレーのバトンタッチのやり方を教えに来てくれた。綺麗なお姉さんだったが、厳しかったので真剣に練習した。運動会当日は、生徒だけで校庭がいっぱいになってしまうので、保護者は校舎内の窓越しに応援していた思い出がある。秋には、掃除に使うバケツを持って、全校生でキノコを採りに裏山へ行った。それできのこ汁を作り、先生方が打ってくれたそばと食べたりした。(横瀬 恵美子)



金砂小学校

金砂小学校には上宮分校があり、その地区の生徒は、3年生までは分校に、4年生になるとこの校舎に通った。昭和47年に上宮分校は統合された。

金郷小学校・金郷中学校

金郷小学校は現在の商工会金砂郷支所・子どもセンターうぐいすの所にあり、金郷中学校は現在の金砂郷小学校の所にあった。小学校は、親が交代で給食のおばさんと一緒に給食を作っていた。冬は、ご飯だけのお弁当を持参し、薪ストーブの上に乗せて温めたりした。薪も交代で持ち寄った。運動会は春は小学校だけで、秋は小中合同で行った。地区ごとの旗があって、家族ぐるみで応援してとても盛り上がったものだった。

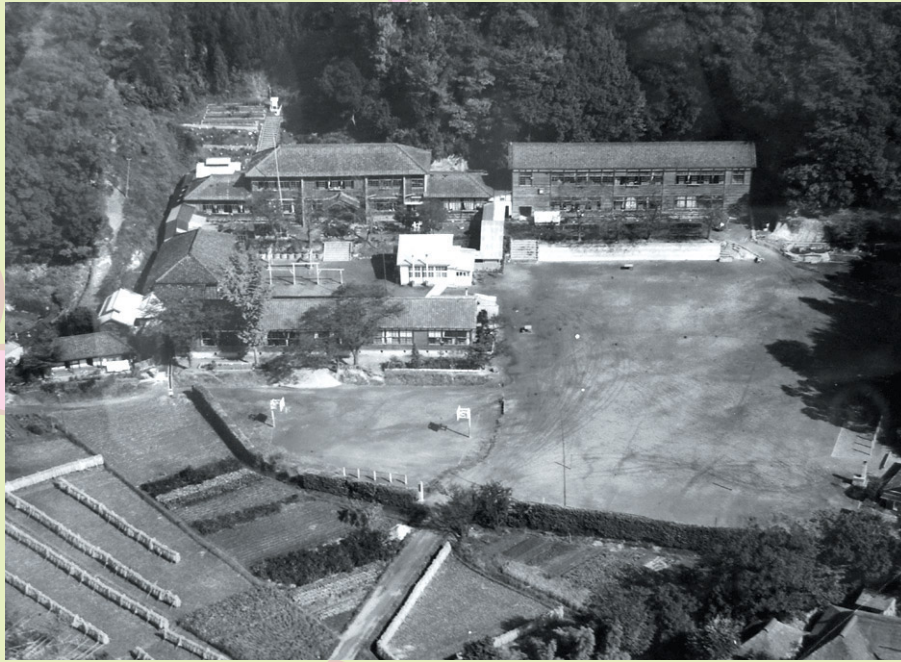


金郷小学校

機初小学校・機初中学校

現在の機初市民ふれあいセンターのところに旧機初小学校があった。階段を上ると昇降口があり、2階建ての校舎は左が1、2年生で右が3～6年生の木造校舎だった。中学校とは渡り廊下で続いていて、旧機初小学校の下の敷地が中学校の木造校舎になっていた。冬の時期は通学途中にあったツララをかじりながら通った。現在の、のぞみ幼稚園の桜の木は機初中学校の敷地と前の田んぼとの境にあったものである。

旧機初小学校を思い出に残そうと、創立百十周年を記念して記念事業協賛会を結成し、卒業生名簿や記念誌の発行、また校庭敷地内（現ふれあいセンター）に機初小学校跡地の石碑を建て卒業生の思い出を大切にしている。
(岡崎 隆男、白石 肇、棚井 浩)



機初小学校

瑞竜中学校

私が入学したころは、統合されて2年目か3年目のころで、まだ校舎も新しくきれいでした。校庭に建設時のクギが落ちていて、朝礼のあとに10分間くらい「クギひろい」という時間がありました。

体育館はあとからできました。新しい体育館にNHKの「のど自慢大会」がやってきて、生徒は昼のリハーサルから全部見せてもらい、夜は大人と一緒にまた見に行きました。先生が出演し、大かっさいでした。(鐘は2つでしたけど…)
(菊池 幾子)



小里小学校



染和田小学校



天下野小学校

誉田小学校

昭和43年1月に6年生で転校してきました。前にいた学校が、鉄筋コンクリートのモダンな新しい校舎だったので、校舎の古さ、木造2階建てがめずらしく、ビックリしました。又、人数が少ないことにも驚きました。クラスメートは25人、そのうち女子は12人。おかげで大歓迎してもらい、皆やさしく親切でした。

小さな校舎、小さな校庭。体育館も講堂もなく、どこで卒業式をするのかと心配していたら友達が「だいじょうぶ。教室が大きくなるのよ。」となぞのことば!? 何と、音楽室と図書室と家庭科室の壁がはずされ、広い広い部屋ができました。(ビックリ!!)

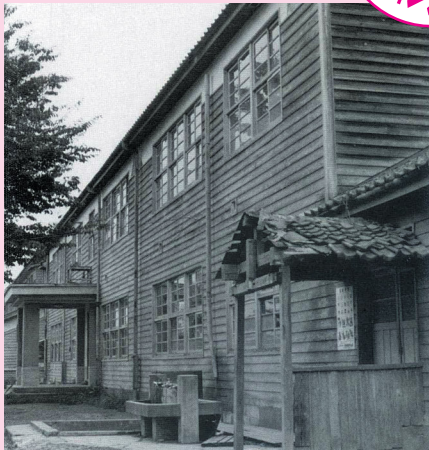
当時は「パンポン」というボールを使った遊びがはやっていて、私も仲間に入れてもらったのが懐かしいです。

卒業式まで、2ヶ月しかお世話にならなかった小学校ですが、同級生は今も仲のよい友達です。(菊池 幾子)

創立20周年記念事業として平成11年に式典が行われました。大洗高校マーチングバンドの演奏をグラウンドで見、とても感激しました。また、創立の時に埋めたというタイムカプセルを開け、続いて、50周年に向けて新しいタイムカプセルを埋めました。平成41年が50周年、タイムカプセルの中にはその時のお祝いで開けようとワインも入れてあるそうです。(塩原 慶子)



誉田小学校



太田中学校



金砂中学校



太田小学校



山田小学校



賀美小学校

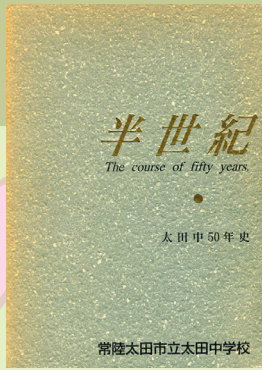


幸久小学校



佐竹小学校

思い出を残すために ～周年事業に取り組む



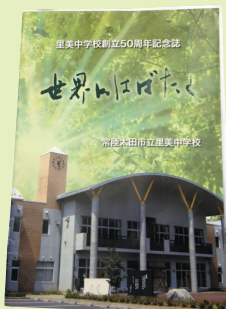
■太田中50年史

「学び舎の思い出」特集最終回にあたり、太田中50年史を見ていたところ、懐かしい顔ぶれがページにあふれていました。平成8年発行、一昔以上前の記録は手に取る人皆懐かしく読みいってしまうものでした。このような周年記念事業に取り組む方たちのおかげで、大切な思い出は今もきちんと残されています。

■里美中50周年

里美中学校は平成24年度に50周年を迎え、様々な記念事業を行ってきました。そのまとめとしての記念誌は、里美の豊かな自然を背景に、新しく歴史を刻むような表紙が印象的です。

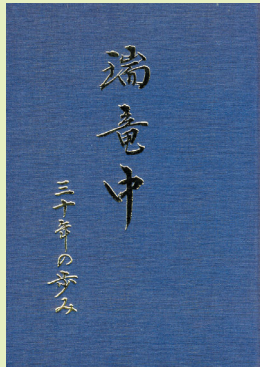
中表紙にある校訓は里美出身の書家吉澤鉄石氏によるものです。



里美中学校記念誌

■瑞竜中50周年に向けて

今年の12月14日に50周年記念事業を行う瑞竜中学校では、昨秋取り組みが立ち上がったばかりです。



平成6年に30周年を迎えた瑞竜中学校は、その折にも記念誌を発行しており、4つの中学校が合併となった記録も、きちんと残されていました。

50周年に向けて、取り組みのキャッチフレーズを生徒会で決めポスターに仕上げ、これか



2月に行われた記念事業実行委員会



生徒会が決めた
キャッチフレーズと
ポスター

ら地域の方々と共に、節目の年を迎えようとしています。地域全体の思い出の集積地ともいえる学校とその思い出の集大成としての記念誌。数十年後の未来へ残されるものは、現在の地域力そのものではないでしょうか。

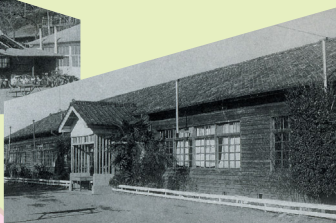
実家に帰ったある日、山吹公園でお祭りがあるというので、ふと思立ち中学校へ通った通学路をのぞいて見た。私たちは今の校舎が新築された直後に入学した初めての年代である。その時には体育館もなく、はっきりした記憶はないが、校舎の屋上で入学式をしていただいた。新しい運動場にはまだ小石が点在し、体育の始まる前にはこの石拾いから始まった。あの時の通学路は随分様変わりをしてしまったね。町並みを抜け、細くて長い田んぼのあぜ道を歩き、源氏川にかかる丸太の橋を渡り、砂利道を走ったものだった。毎日通った通学路は、その面影さえ消えかけ、見えない路となってきているけれど、心の中にはいつまでも懐かしく楽しい路として残しておきたい。

半世紀・太田中50年史より～
昭和48年卒 黒澤 友博



機初中学校

現在の瑞竜中は右の4中学校が統合され設立されたものです。



誉田中学校



河内中学校



佐都中学校

原点 回起

1

「常陸太田市フォトログ」

はじめまして武藤卓です。今回ご縁があってフォンスに参加させていただくことになりました。文章などが苦手な自分ですが妻の協力を得て、まずは自己紹介です。

約25年ぶりに常陸太田に帰ってきました。18歳で上京し、3浪して東京芸術大学油絵科に入学。大学院を出て色々なアルバイトをしながら現代アートの作品を作り銀座などで個展を行ってきました。2004年ハンガリーのブダペストでのグループ展に参加した後、無理にコンセプトを考えて作品を作っている感じや、制作場所や作品の確保、経済面などの理由からアート活動を一旦休止しました。その間、アルバイトの仲間をきっかけにインターネットを始め、友人からWeb制作を依頼されるようになり、その後ベンチャー企業に入社。その会社のWebデザイナーのリーダーを任されるようになりました。しかし、その会社が上場することが決まり、色々制約や、システムチックになっていくデザインなどが嫌になり、別の小さな会社へ移り

ました。そこで知り合った友人とWeb制作を始めました。インターネットの普及で、ネットを使えば場所を選ばずどこでも仕事ができるのでは…と思っていた矢先、東日本大震災が起こり、改めて色々なことを考えさせられました。家族のこと、自分のこと、アートのこと、これから自分が進んでいく方向性などなど。ならばと思い切って、自分の原点に戻ってみようと思い、ふるさと常陸太田へ戻ってきました。

久しぶりにゆっくり見る広い空や雲の流れ、丘の向こうに沈んでいく夕日、懐かしい風景を見て、感動しWebデザインの仕事の合間に写真を撮り始め、写真が溜まっていくうちに、この景色を自分だけではなく、常陸太田を離れて暮らす人達や他の地域に住む人達にもネットを通じて見てもらえれば「嬉しいなあ」と思うようになり、「常陸太田市フォトログ」というWebサイトを作ってみました。一度外に出たことで、以前は、そんなに気にもとめなかった風景が当たり前でなかったことに気づかされました。

そして、写真を撮りながら思いはじめたことがあり、もう一つの常陸太田のWebサイトを作りたいと思っています。それはまだ制作中ですので、次回ご紹介できればと思っています。

(武藤 卓・千絵子)



「常陸太田市フォトログ」 <http://www.hitachiotacity.com/>
facebook ページ : <https://www.facebook.com/hitachiotashi>
twitter : <https://twitter.com/hitachiotashi>



投稿募集!!

皆さんが撮影した「常陸太田の素敵な風景・イベント」をフォンスに投稿しませんか？ 大事に残して伝えたい「常陸太田の今」を募集しています。写真に対するコメントなども添えて、画像データをメールで送付、または撮影した写真を5月末までに封書でお送りください。(応募頂いたデータ・写真は返却いたしません) 画像メール送付の際は、3MBまでを目安にしてください。

応募・投稿先

**フォンス・ネットワーク事務局
常陸太田市生涯学習センター内**
〒313-0061 茨城県常陸太田市中城町3280番地
TEL:0294(72)8888 FAX:0294(72)8880
E-mail:shogaku-c1@city.hitachiota.lg.jp

新太田点描 ①

小川芋銭と太田（上）

河童の絵で有名な小川芋銭は、明治元年（一八六八）牛久藩山口氏の家臣屋敷で生まれた。幼名を不動太郎と称し、後ち茂吉と改め芋銭と号した。幼少から絵が好きで洋画家の本多錦吉郎に学んだ後、朝野新聞やいはらき新聞等に漫画を描いたり、独学で俳句を学んだりしている。

その後、本格的に日本画を学ぶようになり、横山大観に勧められて、日本美術院に日本画を出品し同人として活躍し、昭和十三年（一九三八）に七十一歳で没した。その画風は幻想的な世界を好んで見つけ、特に河童を描くことを得意とした。代表作には「河童百図」がある。

さて芋銭は二回にわたって太田地方を訪れていたことが確認されている。先ず一回目は、明治四十一年（一九〇八）六月に東京の日高有倫堂から発刊された『草汁漫画』に常陸太田と旧水府村の記載がみられるからである。

常陸太田にて 雪村の柳も蘆も枯る宿

掛乞やいつも伊勢屋の革財布

また同時に安寺・持方を題材としたスケッチ画を載せている。（図版参照）ここで芋銭は、「烈公より御羽織頂戴神永元助四代の孫」なる人物の肖像を描き、

夜寒さの安寺持方猿の酒

と詠んでいる。これはたぶん、元助の顔が農作

業や屋外労働のために日焼けして、あるいは焼酎やけのために浅黒い顔でもあったのだろう。

この絵の中に更に三コマの絵があり、一コマは「安寺持方の秋」と題した風景である。他の二コマは、安寺持方の純朴さと言おうか単純無知を笑い話ふうに表示したものである。上段は、うづ高く積んである堆肥を撒き散らかしている「たかこえはつと」下段は、屋根の上の柿の枝に実がなっついて「なりものてうじ」と書いてある。

これは、天保四年（一八三三）水戸徳川家九代藩主斉昭公（烈公）が水戸藩内の北部山村筋を順村した時、安寺持方にも立ち寄ったことに起因する。

この時に藩では殿様の通行に際して「高声・鳴り物」を禁止した。高声とは大声で叫んだり、泣き喚いたり、騒いだり、高笑いをして通行の妨げにならないようにと云うものである。また鳴り物とは音の出るものの使用を

停止するということで獵師が鉄砲を撃つたり鉦や太鼓を打ち鳴らしたり、斧で樹木を伐採する等これら一連の行動を控えさせるというものであった。

盲目帳で有名な安寺持方の住民たちでは高札や廻状・布達では文字が読めないのが理解ができないだろうと、藩の役人が親切心から村役人の家に向き住民を集めて読んで聞かせたのであろう。

ところが事の行き違いはここか



酒の猿方持寺安のさ寒夜

ら始まったのである。住民たちは何を勘違いしたのか、「高声禁止」を「高肥禁止」、即ち田畑にうづ高く積み上げてある堆肥がダメだという理解から、殿様が来る前に低くしようと田畑に撒き散らしていたので、殿様の通行時には異様な臭いがただよっていたという。

さらに、「鳴り物停止」にいたっては生物（なりもの）即ち、果実や木の実はいけナイというので家族、集落の住民総出で樹木・草木の実をきれいにもぎ取って殿様を迎えたという。

以上、二つのエピソードは笑い話として近在・近郷の人々に今も伝承されているが、芋銭もやはり現地で神永元助の肖像を描きながら、この話を聞かせられたのであろう。また、ネギ（葱・禰宜）やチヨウズ（手水・長頭）の話、そして、蚊帳の話等も聞いていたかもしれない。

（吉成 英文）